

プログラム・ノート

◆グリンカ／歌劇『ルスランとリュドミラ』序曲

ミハイル・イヴァノヴィチ・グリンカ（1804–1857）は、ロシア西部スマレンスク近郊の貴族の家系に生まれ、幼少からピアノやヴァイオリン、作曲等を熱心に学んだ。当時ロシアではイタリアやドイツから輸入された西洋音楽が主流であったが、グリンカは次第にロシア人としての音楽を作りたいと考えるようになり、ロシアの民族音楽を題材にしたオペラを書くようになった。こうした作品はムソルグスキーやボロディンら、後のロシア国民楽派5人組にも影響を与える、「ロシア近代音楽の父」と呼ばれるようになる。

「ルスランとリュドミラ」は、ロシアの大詩人であり、グリンカの友人でもあったプーシキンが書いた長編の詩を題材とした5幕構成のオペラ。軽快で華々しく始まる序曲は、とある放送局のクラシック音楽番組のオープニングとして使用されたほか、某カンタービレな漫画で主人公の爽やかライバル指揮者が「並みいるライバルを蹴散らす」象徴の曲として指揮をしたことでも有名（？）である。

物語の舞台は9世紀、ウクライナやロシアの祖国にあたるキエフ公国。主人公である騎士ルスランは大公の娘リュドミラ姫と今まさに婚礼の儀を挙げんとしている。ところが、突如現れた魔術師チエルノモールによりリュドミラ姫は攫われてしまう。

キエフ大公は、ルスランのほか、かねてよりリュドミラ姫に求愛していた騎士ファルラーフと王子ラトミールに姫の救出を命じ、「救出できた者に姫を与える」と宣言する。こうして若者たちはリュドミラ姫を救う冒険に出かけることになるのであった。

道中、魔術や他の若者の妨害、他の女（ゴリスラヴァ）の誘惑といったオペラ特有のドタバタに巻き込まれるも、最後にはルスランがリュドミラを助けだし、大団円を迎える。

曲の構造はシンプルなソナタ形式。序奏から第1主題にかけての急速で華麗な部分は、実は本編では終わりも終わり、眠らされたリュドミラ姫が無事目覚めてめでたしめでたしの場面。ヴィオラとチェロから誘われる第2主題は、本編では「ルスランのアリア」と呼ばれる見せ場のひとつだ。終盤、トロンボーンを中心に奏でる不気味な全音音階の下降は魔術師チエルノモールの登場シーンで使われている。

ところでこのルスランという男、意気込んでリュドミラ姫を助けに行く割にはゴリスラヴァからの誘惑には転がるように負けそうになっていたりする。まあそんなものでしょうか。

(G. Y.)

◆スマタナ／連作交響詩『わが祖国』より「ターボル」「ブラニーク」

大国の政治や宗教諸派の対立に翻弄され、様々な民族が入り乱れてきたチェコは、19世紀にはハプスブルク帝国の支配下にあった。このような複雑な歴史的経緯を持ち、抑圧されたチェコ人の間に民族意識が沸き上るのは必然的だったといえる。連作交響詩「わが祖国」は、ベトルジハ・スマタナ（1824–1884）の代表作であると同時に、チェコ民族のアイデンティティの象徴ともいわれる、チェコ国民音楽の記念碑的作品である。

本作品は歌劇「リブシェ」（チェコ建国の女神）作曲中に構想され、1874年から1879年にかけて作曲された、チェコの伝説、自然、歴史を表す「ヴィシェフラド」「ヴルタヴァ（モルダウ）」「シャールカ」「ボヘミアの森と草原から」「ターボル」「ブラニーク」の6つの交響詩で構成される。当時のスマタナは、グリンカのロシア・オペラに影響され、ステージオペラにチェコの生活を反映させようと決意し、設立されたばかりのプラハ仮劇場において念願の指揮者の地位を手に入れ、「売られた花嫁」や「リブシェ」の成功もあって、チェコを代表する音楽家としての地位を確立しつつあった時期にあった。

第1曲の「ヴィシェフラド」冒頭で、吟遊詩人が奏でる古の王国の栄枯盛衰を歌うハープの主題は全曲を通じて繰り返し現れるが、この主題のB♭-E♭という音はとりもなおさず、スメタナのイニシャルである。この曲にかける作曲家の並々ならぬ自負心が覗える。

スメタナは本作作曲中に聴力を失い、ようやく手に入れた歌劇場指揮者の地位も手放さざるを得なくなる。それでもなお、全曲を完成させるべく作曲者を突き動かした「何か」に、この曲がチェコのみならず国際的に広く高い評価を得られた所以があるように思えてならない。

本日演奏する「ターボル」と「ブラニーク」は、伝説や祖国の自然を歌った連作交響詩のそれまでの4曲と異なり、チェコにおける近代史と未来の勝利を表したものであり、作曲者もこの2曲は一緒に演奏されることを望んでいた。

《ターボル》

ターボルとはプラハの南に位置し、宗教戦争の先駆けとなったフス戦争において、ドイツ出身のボヘミア国王軍と教皇軍の連合軍と争った、チェコのフス教徒が本拠地としていた町である。この曲ではチェコの古い音楽であるフス教徒の讃美歌「汝ら神の戦士よ」がフス教徒の主題として使用されている。

冒頭、ホルンによって断片的に奏される「汝ら、神の戦士なり、神の掟に服従するなり」の主題はやがてトゥッティによる宣言的な強奏で確保される。この「フス教徒の主題」は、ベートーヴェンの運命主題のように「ターボル」と「ブラニーク」を通じて現れる。木管楽器の弱音による安らかなフレーズ「神のご加護を祈り、神を信じたまえ」を挟みながら、「汝はついに神とともに勝利を得るだろう」主題に導かれて、フス教徒の英雄的な戦いを描いていく。

《ブラニーク》

前曲の終結から連続するかのように「フス教徒の主題」がトゥッティで現れ、フス教徒の戦いが描かれる。戦いがいったんフェードアウトすると、オーボエに主導されて羊飼いの牧歌が歌われ理想郷としてのボヘミアが現れる。理想郷はしかし再び戦禍に踏みにじられるが、ホルンによる「汝はついに神とともに勝利を得るだろう」主題に先導され、神の賛歌へ発展していく。

やがて、前出の主題とともに「ヴィシェフラド」主題が高らかに響き渡りながら、過去の歴史と現在が結び付けられた壮大な凱歌が上がり、チェコ民族の最終的な勝利を確信しながら曲を結ぶ。

(K. G.)

◆ベートーヴェン／交響曲第5番 ハ短調

ベートーヴェンの交響曲第5番「運命」。曲目紹介文を書こうとしてはたと困りました。なぜなら余りにも有名過ぎる曲だからです。近所の小学生100人中100人が、この曲聴いたことがある！と自信を持って手を挙げること間違いないです。というわけで、今回のリハーサルの際に指揮者の武藤先生がおっしゃったことを思い出しながら徒然なるままに。

まず最初に、この曲を終始貫いているものは、怒り、否定、決然、変わらない意志の強さ。発散の音楽的ではなく抑圧の音楽。ドイツ語の「Nein！」（違う！）という単語がこれほどまでに似合う曲はないように思われます。

さて、第1楽章 Allegro con brio：余りにも有名過ぎるモチーフ「運命は扉をたたく」で始まるこの楽章、冒頭は8分休符と8分音符3つと伸ばしの音で構成されており大変シンプルでありますが、武藤先生曰く、このモチーフは知的所有権的な新しさ！とのこと。そして、このたかだか1つの休符と3つの音に、過去200年以上の長きに渡り世界中の演奏家をどれだけ悩ませ、苦労させ、喜びを感じ続けさせていることか！そして今なお現在進行中、進化し続ける

モチーフであります。そしてこの第 1 楽章の楽譜を眺めると、8 分音符より細かい音符や休符が一切存在しないことに気がついて、あっと驚きの声を上げることでしょう。8 分音符のみで交響曲が書けることを世の中に示した偉大かつ稀有な作品であります。そのためか、ぱっと見た目の楽譜ヅラはとてもシンプルで演奏もとても簡単そうに見えるのですが、ところがどっこい騙されてはいけません。技術的にも音楽的にも非常に難度が高いことを、演奏してみて初めてわかることでしょう。

次に優美な緩徐楽章の第 2 楽章 *Andante con moto*：冒頭がこれまた世界中の演奏家を悩ませ続けている超難度が高いチェロとヴィオラのソロ。オケのオーディションの曲に必ず採用されるといつても過言ではないくらい、技量と音楽性が問われる瞬間です。でも大変甘美な優しいメロディです。お楽しみ下さい。

第 3 楽章 *Allegro*：ここに再び第 1 楽章の例の冒頭のモチーフが若干形を変えて常に登場します。それは最初は決然とした叫びを表し、楽章の最後ではこのモチーフの心臓の鼓動のような不安感さをティンパニーで表現しています。

そして最後に第 3 楽章から連続する第 4 楽章 *Allegro*：ここで初めて喜びに満ち溢れ、第 1 楽章には一切見られなかつた8分音符や3連符や符点といった多様な音形が多用されることで、生き生きとした表情を見せることとなります。

有名中の有名曲の「運命」、どのような音楽となるか是非お楽しみ下さい。これから 1 週間、あなたの頭の中は「運命」でいっぱいになってしまい仕事が手につかなくなることが、私どもの唯一の心配事であります。

(T. S.)

=====